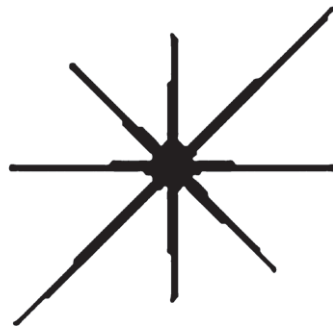


# コメット通信 44

[24年3月号]



*comet book club*

éds. de la rose des vents - suiseisha

目次

【特集 ニコラ・ブリーオーの思想的可能性】

ある関係的風景のラフスケッチ  
辻憲行—————3

「記号航海士」としてのアーティスト  
武田宙也—————6

関係性，けれどもグリッサンの……  
杉田敦—————8

【特集 ニコラ・ブリオーの思想的可能性】

## ある関係的風景のラフスケッチ

辻憲行

道路も風景の多くも人工的なもので、芸術作品とは呼べない。その一方で、芸術にはない何かを私に与えてくれた。最初はそれが何なのかわからなかったが、その効果は、私が芸術に対して持っていた多くの見方から私を解放してくれた。芸術では表現されなかった現実がそこにあるように思えた。  
——トニー・スミス<sup>(1)</sup>

『関係性の美学』はリレーショナル・アートの形式に関する問いから始まる。理論的言説の不備によって、それらの作品は形式を持たない「行為やプロセス」とみなされ、分析の対象とされず、作品として受容すらされていないため、その形式の解読は最優先の課題となる。伝統的な基準に対して「破壊的」なそれらの作品についてブリオーは、「相互的、交歓的（コンヴィヴィアル）、関係的なゲーム」と記述している。

芸術作品の形式、つまり作品の知覚可能な諸要素を重視し、分析対象とするフォーマリズムは、芸術表現におけるモダニズムの勝利とともに支配的な地位を確立することになる。中でも戦後のアメリカ美術の隆盛に伴い、とりわけ強い影響力を持ったのはクレメント・グリーンバーグのフォーマリズムで、そこでは、絵画や彫刻などの芸術のジャンル毎の領域が厳密に規定され、逸脱を認めず、美術史の自律発展が強調された。

ブリオーが「関係性の美学は、単一の起源や目的を記述する芸術理論ではなく、形式についての理論なのである」と書くとき、念頭に置かれていたのは、グリーンバーグ的な純粹主義のフォーマリズムを見直し、「行為やプロセス」をも含めた形式の理論を可能にすることだった。とはいえそれは、アートに新たな目的や形式的な条件を導入することによって実現されるのではない。ブリオーはアートの歴史的展開をゲームに例える。ゲームにはそれをプレイするにあたってルールが定められており、プレイヤーはそのルールに従ってプレイする。だが、ゲームのルールは不変ではなく、プレイのありように応じて変更が加えられ続けるのである。形式についても同じく、観客を含む逸脱的なプレイヤーの実践や社会状況の変化によって、その枠組みは変更され続けるのだ。リレーショナル・アートにおいて参加や相互作用性はそのために要請される。

1990年代のリレーショナル・アートの誕生の背景には、都市化の進展と、通信技術の革新によるコミュニケーション回路の高速化と多様化がある。都市化によって人間同士の距離が近づき、さらに映像機器、ケーブルテレビ、そしてインターネットに代表されるコンピューターネットワークにより、距離や時間的な隔たりを超えて人間の相互的なコミュニケーションの総量が爆発的に増加し、そして常態化していった。こうした状況が、人間同士の相互関係を物理的に可視化し、それらを素材とする芸術的实践を可能にした。しかし、形式化された人間関係は容易に物象化され、商品として取引の対象となる。商品化された人間関係は、(マーケティング)コミュニケーションによって巧妙に特定の商品の消費行動に導かれていく。リレーショナル・アートはそうした疎外の回路を迂回する、別の交換の回路を開くものだった。

『関係性の美学』に続いて書かれた『ポストプロダクション』で、ブリオーはDJやサンプリングな

どの先行する形式の引用や再利用に基づく文化によって駆動される実践を取り上げた。同書は、既存の制作物の享受／消費という受動的な行為と新たな作品の創造という主体的な行為を結びつけるポストプロダクションの文化に注目することで、創造的／活動的な生の領域から排除されていた日常的で私的な営為に光を当てた。

90年代から2000年代にかけては、コンテンポラリー・アートにおけるアーカイビングへの関心が高まった。作品や制作行為に対して従属的なものとみなされていた書類や様々なメモラビリアを収集し保存することが制作手法の一つとなっていった。そうした動向を背景に、リサーチ型のアートワークが数多く見られるようになったのも同じ頃だ。また、美術史を含む歴史研究全般においてオーラルヒストリーが広く注目され、積極的な取り組みが行われ始めたのも同じ頃である。オーラルヒストリーは、「逸話」として周縁化されてきた調査対象となる人々の生の時間や交換の様態を、その活動や制作の重要な決定要因として捉え直す試みとしても見ることができる。

ブリオーは近著において、21世紀のアーティストの制作行為の特徴を人類学的なアプローチに見出している。彼らは、マルセル・モースやレヴィ＝ストロースらが非西洋の人々の社会的交換の様態に西洋的な主体／客体の二元論的対立構造によらない拡張された主体性を見出したように、自らの文化の中で見過ごされていた対象やあらゆる受動的な存在との新しい関係に基づく形式を生み出していると、ブリオーは考える。こうした包摂性のアプローチは、名もない、顧みられることのない、生の価値転換をもたらす作品形式を可能にするかもしれない。だが気をつけなければならない。新しいアートはその黎明期にはその存在を脅かす、模倣物を伴って現れる。グリーンバーグは前衛を擁護するために、芸術の結果だけを模倣しているとして糾弾したキッチュを芸術の領域から切り離さなければならなかったし、ブリオー自身もまた、リレーショナル・アートのために、アートが可能にする適切な繋がりを盗用し、売りに出す、利潤追求の技術としてのコミュニケーションとを切り分けなければならなかった。私たちの時代の包摂性の美学は、隠されてきた生の領域を形式として捉えることを可能にするために、そこで繰り広げられる私たちの行為をアーカイブし、聞き取り調査し、イメージ化していこう。それらは美的な表現を鼓舞する肥沃な土壌となる一方で、同じことがテック企業によってよりスムーズに大規模に遂行され、ビッグデータやLLMの形式において、社会的再生産を強化する力の源泉としても利用されることにもなる。私たちの生きられた生が、サービス産業や、私たちの欲望をさらに効率的に管理するための素材として、私たち自身から疎外されていく。コンテンポラリー・アートは、こうした混沌の中を生きるための形式を常に発明し続ける必要がある。

ブリオーは同じ著作の中で「統合的關係性の美学」について語る。日常の中で生じる、人間や非-人間、微生物や無機物、それらによって構築された環境との偶然の特異な出会い。そこで行われる交換を形式として包摂する、この不安定であいまいな美学は、あらゆる行為が支配的なシステムの下でカテゴライズされ、その分離を強化するために価値づけられる現代において、可能な主体化のオルタナティブに焦点を合わせる。

#### 【注】

- (1) Tony Smith, quoted in David Salomon, "The Highway Not Taken: Tony Smith and the Suburban Sublime," September 2013, Places, <https://placesjournal.org/article/the-highway-not-taken-tony-smith-and-the-suburban-sublime/>.

執筆者について――

辻憲行（つじのりゆき） 1970年生まれ。元東京都写真美術館学芸員。小社刊行の訳書には、ニコラ・ブリーオー『[関係性の美学](#)』（2024年）がある。

【特集 ニコラ・ブリオアの思想的可能性】

## 「記号航海士」としてのアーティスト

武田宙也

ニコラ・ブリオアは、日本においては長らく「名のみ有名」な論者の一人であり続けた。フランスのキュレーターと彼が提唱した「関係性の美学」のコンセプトは、2000年以降我が国でも広く知られるようになった一方で、日本語でアクセスできる本人の著作はほとんど存在しない状態が長く続いたためである。こうした状況は、『関係性の美学』をはじめとするブリオアの主著の大半が、出版後間もなく欧米諸語や韓国語などに訳されてきたことを考慮するならば、かなり特殊なものであったと言えよう。それに対して、2022年に『ラディカント——グローバリゼーションの美学に向けて』、2023年に『関係性の美学』と、ここ2年ほどのあいだに遅ればせながらも邦訳が相次いで出版されたことにより、こうした状況によろしく変化の兆しが見られるようになった。ここであらためてブリオアの主著を確認しておこう。

『関係性の美学』 [Esthétique relationnelle, Dijon, Les Presses du réel, 1998]

『生の形式——近代芸術と自己の創出』 [Formes de vie. L'art moderne et l'invention de soi, Paris, Denoël, 1999]

『ポストプロダクション——シナリオとしての文化：芸術はいかに現代世界を再プログラムするか』 [Postproduction. La culture comme scénario : comment l'art reprogramme le monde contemporain, Dijon, Les Presses du réel, 2002]

『ラディカント——グローバリゼーションの美学に向けて』 [Radicant. Pour une esthétique de la globalisation, Paris, Denoël, 2009]

『エクスフォーム——芸術、イデオロギー、廃棄』 [L'Exforme. Art, idéologie et rejet, Paris, PUF, 2017]

『包摂——資本新世の美学』 [Inclusions. Esthétique du capitalocène, Paris, PUF, 2021]

日本では、ブリオアといえば「関係性の美学」の人として知られているため、先に『ラディカント』の邦訳に触れた読者は意外に思われたかもしれない。というのも、そこで彼が試みているのは、ポストモダンの多文化主義を問い直し、「ラディカント」なる植物的メタファーに基づいて文化的アイデンティティを再考することであり、それは一見、『関係性の美学』を貫く問題意識——現代のコミュニケーションのあり方をめぐる問題意識——とは異質のものに思われるからである。

ただ、「表看板」や扱う題材こそ著作ごとに異なるが、それらを何冊か読めばわかるように、ブリオアの思想には特有の型や、核となるヴィジョンのようなものが確かに存在している。上記の主著のうち、ブリオア自身は『関係性の美学』から『ラディカント』までをひとまとまりのものとみなし、『エクスフォーム』以降の著作から区別している<sup>(1)</sup>。ここで便宜上、前者を「前期著作」、後者を「後期著作」と呼ぶならば、前期著作における中心概念のひとつが「記号航海士」[sémionaute]であることは疑いがないだろう。これは「sémios [記号] と nautos [航海] からなる」<sup>(2)</sup> ブリオアの造語で、『関係性の美学』巻末の「語彙集」で導入された後、『生の形式』から『ラディカント』までの著作でとりわけ存在感を発揮した概念である<sup>(3)</sup>。上記の著作でブリオアは、アーティストを、さまざまな記号

のなかに道筋をつくりだす「記号航海士」として描きだしている。それは多種多様な出自をもつ記号が漂う海の上を、自分なりの道筋を見いだしながら航行する旅人である。現代のアーティストは、さまざまなモノや形態が固有の文化から半ば切り離され、半ばつなぎとめられた状態でグローバルな空間に散らばるなかを、打ち立てるべき連関を探しもとめて放浪する。この連関は必然的に異種混交的なものとなるだろう。

「記号航海士」としてのアーティストは——『生の形式』においては錬金術師、ダンディ、世紀末文学からなる系譜のなかに位置づけられ、『ポストプロダクション』においてはDJやインターネットカルチャーという同時代の文化現象を範例として説明され、『ラディカント』においてはカリブ海地域に由来するクレオール主義と結びつけられる、というように——、著作ごとに文脈化の仕方に違いはあるものの、プリオーの前期思想に一貫して認められるモチーフである。この観点からあらためて『関係性の美学』へと目を向けるならば、そこで彼はアーティストの役割を、芸術の領域と芸術外の領域を横断し、両者を媒介するところに見いだしていた。言い換えれば、複数の領域にまたがる「記号」を脱文脈化ないし再文脈化しつつ結びつける——そして、その営みそのものを作品として表現する——のがアーティストの役割というわけである。本書においては、「記号航海士」の概念自体はいまだ前景化していないものの、発想としては同様のものが認められよう。記号という大海原にこぎだす船乗り——前期のプリオーが紡ぐ一見雑多な芸術論は、彼のうちにある中心的なアーティスト像を共有したうえで読み解くならば、そこまで突飛なものではないだろう。

#### 【注】

- (1) 以下の動画での発言より。「[ACK Talks 08] スペシャルトーク：ニコラ・プリオー」([https://www.youtube.com/watch?v=\\_HZrMPb4s5w](https://www.youtube.com/watch?v=_HZrMPb4s5w))。
- (2) ニコラ・プリオー『ラディカント——グローバル化の美学に向けて』武田宙也訳、フィルムアート社、2022年、84頁。
- (3) たとえば『生の形式』において、同概念は次のように説明されている。「あらゆる芸術実践は記号の動きを管理することに基づいている。[……] 記号を通じて個人的な道筋を発明するアーティストのことを記号航海士と呼ぼう。記号航海士は、道程を想像し、作品、行動、プロジェクトによってその道筋をつける。」(Nicolas Bourriaud, *Formes de vie. L'art moderne et l'invention de soi*, Paris, Denoël, 1999, p. 132.)

執筆者について——

武田宙也（ただひろなり） 1980年生まれ。現在、京都大学准教授。専攻＝美学・芸術学。小社刊行の著書には、『[ミシェル・フーコー『コレージュ・ド・フランス講義』を読む](#)』（共著、2021年）がある。

【特集 ニコラ・ブリオーの思想的可能性】

## 関係性, けれどもグリッサンの……

杉田敦

ようやくの訳出をねぎraitたいのは確かにそうなのだが、どうしてもその遅れに対する愚痴が口をついて出てしまう。原語の出版は1998年、英訳が2002年なのだが、ちょうどその時期はアートにとっても大きな転換期だった。国外では2002年にオクウィ・エンヴェゾーがドクメンタを指揮し、社会的、政治的姿勢をアートに求めるようになった。国内では、2000年から大地の芸術祭が始まり、地域社会へのアートのインストールが本格的に試みられようとしていた。そうしたタイミングで、『関係性の美学』が広く読まれているか否かは、その後の展開を大きく左右することになったはずだ。個人的には、90年代のアートシーンに触れるなかで、ブリオーが採り上げるような表現が目立つようになり、何ともいえない居心地の悪さに困惑していたのを記憶している。そんなとき、ブリオーによる論考は刺激に満ちていた。彼のテキストがもやもやした想いを解消してくれたときの感動を忘れることができない。そのため、同時にとは言えないまでも、多少のタイム・ラグで共有することができていたらどうだっただろうかと、どうしてもそう考えてしまうのだ。

90年代のアートの動向は、『関係性の美学』執筆の契機でもあった、ブリオー自身がキュレーションした『トラフィック (traffic)』展に特徴的ではあるが、必ずしもそれだけがそうした性質を備えていたわけではなかった。1993年にハンブルクの芸術協会で開催された『バックステージ (backstage)』、94年にパリ市立近代美術館で開催された『愛の冬 (l'hiver de l'amor)』、クストラウム・ウィーンで開催された『ロスト・パラダイス (lost paradise)』、さらにはそこに97年のカトリーヌ・ダヴィッドのドクメンタの「100 Days - 100 Guests」を加えてもよいかもしれない。いずれにしても、まさにひとつの時代的傾向として、ブリオーが分析してみせたような性質が各所で試みられていたのだ。そうした空気は、後のオクウィ・エンヴェゾーのPC的な性質を準備するものでもあったし、ソーシャリー・エンゲージド・アートへの展開を胚胎するものでもあった。しかし、確かにそうした試みは有意義なものではあったのだが、同時に、ブリオーが提起した視点がなければ取りつきにくいものだったのも事実だ。訳書を待ち焦がれていたこの国の場合は複雑で、彼の視点を共有することもないまま、十数年後に提起されたクレア・ビショップのブリオー批判に、一気に短絡してしまうことになる。それは歯痒く、受け入れ難いものだった。時間はかかってしまったが、遡るかたちであれ、そうした経緯を批判的に検討できる機会が訪れたことを、まずは素直に喜ぶべきなのかもしれない。それは、冒頭の愚痴に勝るものであるはずだ。あるいはさらに、一時的な共有が可能であったとしても、そこからビショップの批判へと足早に消費の視線が移行してしまうことになったのであれば、それを回避できたこうした遅れこそが、90年代のアートが向き合っていたであろう問題と、真摯に正対することを可能にしてくれていると考えるべきなのかもしれない。

ところで、ブリオーのテキストには、不思議な斥力が働いている。ある人物の考察に大きく依拠しているにもかかわらず、その名前が明示されていないのだ。エドゥアール・グリッサン。言うまでもない、ポスト・コロニアル思想の中心人物のひとりだが、ブリオーは、彼の名前を出すことを意図的に遠ざけている。『関係性の美学』は、容易に『〈関係〉の詩学』を想起させる。原題は、邦題ほど酷似していないが、美学 (“Esthétique relationnelle”) と詩学 (“Poétique de la Relation”) の距離は近い。



詩学の出版は、1990年だが、80年代に書かれたものをまとめたものだ。プリオーの美学の核心が形成されたのは『トラフィック』展の1996年前後と思われるが、明らかにグリッサンの方が先んじている。グリッサンの関係性に注目した考察が、ポスト・コロニアル思想に興味を抱いた当時のアーティストたちに影響し、それが90年代のアートの特異な動向を形成することになり、プリオーは、単にそれを再確認したに過ぎないというも、あながち間違っているとは言えないだろう。

グリッサンは、千を越えるとも言われる島々に分散するアンティル諸島上空に立ち昇るアイデンティティを、関係を手がかりとして考察し、さらにそこから、国や地域、民族など、既存の枠組みで編成される世界とは異なる、全-世界という、ありえない規模の共同体を描いてみせた。グリッサンの立場は、血液やDNAなど、医学的根拠まで対象として、アイデンティティそのものの在り方に疑義を投げかける、エレン・サミュエルズのような今日の研究者とも呼応するものだし、依存関係を肯定的に捉えようとする、ケアをめぐる議論やクリップ・セオリーにも関係してくることになる。あるいはそこから、ジョルジュ・バタイユ、モーリス・ブランショ、アルフォンソ・リンギスら、共有というものを批判的に問い直そうとする共同体論を想起することもできる。そのような視点に立つとき、確かにプリオーの視野は狭いし、それを踏まえて行われたビショップの反論については言うまでもない。しかし、プリオーに限れば、奇妙なことにその名を伏せたままとしても、グリッサン的な理解を手にしていないというわけではない。美学からおおよそ10年後に出版された『ラディカント』は、より明確にそのことを示している。ドゥルーズのリゾームとグリッサンの全-世界を混ぜ合わせたような理解が展開されているそこでは、その根幹を、ヴィクトル・セガレンの他者受容が支えるかたちになっている。セガレンは、他者を「理解」することではなく、他者と共にいること、他者の気配と共にいることの意味を凝視した20世紀初頭の思索家であり旅人だ。一見、唐突とも言えないプリオーのセガレンへの言及だが、グリッサンが、彼の詩学、それに続く『多様なものの詩学序説』、『全-世界論』の基盤にセガレンを置いていることを考えると納得がいく。その展開の甘さが気になるだけでなく、『オルターモダン (altermodern)』展がそのよい例であるように、展覧会というかたち

で具現化することに難のあるプリオーだが、支えるために手繰り寄せたものに対する感覚は優れている。いや、そうだろうか？ グリッサンがドゥルーズに依拠していることを考えれば、結局彼が手繰り寄せたとされるものは、そのどれもがグリッサンのツール・ボックスの中のものばかりではないか。しかも、手がかりを与えてくれた人物の名を伏したままなのだ。むしろ、質が悪く考えるべきなのかもしれない。しかしそれでも、90年代のあの奇妙な動向と対峙していたときの困惑を、解消させてくれたことに対



する想いが色褪せることはない。それに応えることができることがあるとすれば、むしろその手がかりを与えてくれたグリッサンまで戻って、表現と社会の、そして世界との関係を考察し続けることだろう。アートに限定された意味に自閉する必要はない。むしろそこから踏み出すことこそが重要なのだ。プリオーが提起した視点は重要だが、だからといって芸術、美術の世界に自閉している必要はな

い。自閉してしまうのであれば、ブリーもビショップも手放して、グリッサンやリングスに手を伸ばせばよいだけなのだ……。

執筆者について——

杉田敦（すぎたあつし） 1957年生まれ。美術批評家。小社刊行の著書には、『[芸術と労働](#)』（共編著，2018年）が、訳書にはフランコ・“ビフォ”・ベラルディ『[蜂起——詩と金融における](#)』（2023年）がある。

# 水声社の新刊

(2024 / 3 / 29)

## 【4月の新刊（予定）】

### 夢見る言葉——作中物語の力学

山田仁

【4.4 発売】

▶『物語のディスコース』が確立した「語り水準」を、認知言語学、メディア論、言語哲学の知見を踏まえて、テキストの意味生成の動的なプロセスへと捉え直せるのではないか。ファウルズ、ボルヘス、カルヴィーノ、ルイス・キャロルの作品を分析し、物語論の新たな展望を示す。

A5 判上製 / 376 頁 / 5000 円+税 ISBN : 978-4-8010-0800-7



### 過去にならない恋

大浜啓吉

【4.4 発売】

▶高校時代の初恋が忘れられず、21年たって大学教授となった美高颯は美紫緒に手紙を送った。おたがい家庭をもっていたが、二人は初恋を成就させる……。青春に芽吹く恋を起点に、理想の女性を描くフィクション。

四六判上製 / 224 頁 / 2500 円+税 ISBN : 978-4-8010-0808-3



### コーヒー・カフェ文化と阪神間

《大手前大学比較文化研究叢書 19》

海老良平編

【4.4 発売】

▶文化・地域をこえひろがってきたコーヒー・カフェ文化は、現在、どのような状況にあるのか。食品科学、日伯交流、ツーリズムをはじめ、多角的にコーヒー・カフェ文化を検証し、阪神間における「知のサロン」のあり方を考える。

A5 判上製 / 218 頁 / 2800 円+税 ISBN : 978-4-8010-0802-1



# 僕が目で君自身を見ることができた なら

《フィクションのエル・ドラード》

カルロス・フランス／富田広樹訳

【4.12 発売】

▶ 19世紀半ば、南米大陸の調査旅行に同行した画家ルゲンダスは、貴婦人カルメンと邂逅するが、一線を越えたふたりの前に現れたのは、ビーグル号で航海中のチャールズ・ダーウィンだった……。史実とフィクションを巧みに織り交ぜ、見事な想像力で《愛》を描きだす野心的長編。

四六判上製／437頁／4500円＋税 ISBN：978-4-8010-0756-7



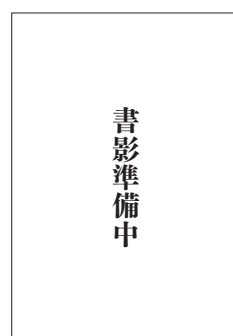
# イタリアと日本の前衛——20世紀の日伊交流

ふくやま美術館編

【4.17 発売】

▶ 20世紀初頭の未来派の受容から、フォンタナと瀧口の友情、そしてムナーリのデザインへと至る、日本とイタリアの作家たちとの交流の軌跡を、豊富な資料から描き出す。2024年ふくやま美術館開催の展覧会の公式図録！

A5判並製／156頁／3000円＋税 ISBN：978-4-8010-0806-9



# 食べる——理論のためのレッスン

《人類学の転回》

アネマリー・モル／田口陽子＋浜田明範＋碓陽子訳

【4.17 発売】

▶ いかにしておいしく食べ、よりよく生きるのか——。地球の持続可能性の問題を背景に、アーレント、メルロ＝ポンティ、レヴィナスをはじめとする西洋哲学における人間中心主義を、日常の《食べる》ことから問い直す。アクターネットワーク理論の果ての、この世界を生き抜くための知のレシピ。

四六判上製／334頁／3500円＋税 ISBN：978-4-8010-0803-8



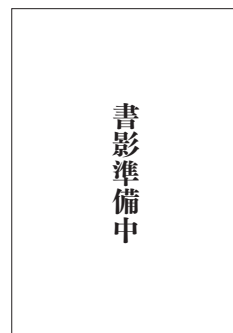
# ロシア宇宙芸術——宇宙イメージからみるロシア美術史

生熊源一

【4.25 発売】

▶ 人工衛星スプートニク1号の打ち上げと、ガガーリンの宇宙飛行で幕を開けたソ連のプロジェクトは生活レベルまで浸透し、芸術家たちの想像力を宇宙へと差し向けることになる。ロシア宇宙主義を背景に、作家たちが形づくる星座を観測する。

A5判上製／336頁＋別丁カラー24頁／4500円＋税 ISBN：978-4-8010-0809-0



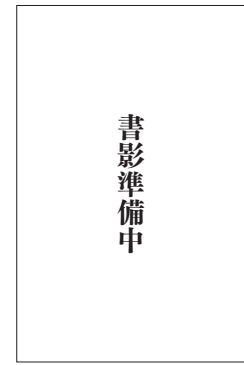
# 中村真一郎手帖 19

中村真一郎の会編

【4.30 発売】

▶江戸文人の世界を画期的なアプローチで描き切った中村文学の高峰、「評伝三部作」に改めて迫る。執筆＝田中優子、揖斐高、高橋博巳、助川幸逸郎、毬矢まりえ。『蠣崎波響の生涯』刊行直後に行われた著者による講演も収録。

A5 判並製／88 頁／1000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0810-6



## 【3月の新刊（既刊）】

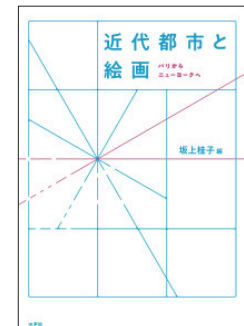
### 近代都市と絵画——パリからニューヨークへ

坂上桂子編

【3.4 発売】

▶芸術の都パリは、19世紀の大改造を抜きには語れず、都市生活が新たな視覚と感性を画家にもたらし、印象派以降の潮流が生まれた。かたやニューヨークでは、高層ビルに象徴される巨大な時空間が、前衛芸術の伸長を促した。二大都市で活躍した画家に焦点を当て、都市と芸術の創造的関係を探る。

A5 判上製／250 頁＋別丁カラー 8 頁／4000 円＋税 ISBN：978-4-8010-0795-6



### オペラの時代——音楽と文学のポリフォニー

荒木善太＋和田恵里＋福田美雪編

【3.6 発売】

▶人々がオペラに熱狂した近代のパリを舞台に、オペラと文学の相互作用が奏でる豊かなポリフォニーの世界とは？ 音楽史と文学史を越境する、多様なアプローチによる7つの鮮烈なオペラ論。

四六判上製／321 頁／3500 円＋税 ISBN：978-4-8010-0728-4



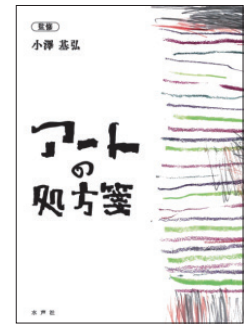
# アートの処方箋

小澤基弘監修

【3.6 発売】

▶新型コロナウイルス感染症により閉塞した社会のなかで、いかに人びとは生きることができるのか。《みる》、《つくる》、《かながえる》というアートの力から、現代の生きづらさに向かい合う。

A5 判並製 / 298 頁 / 2800 円 + 税 ISBN : 978-4-8010-0792-5



# 身体の言語——18世紀フランスのバレエ・ダクシオン

川野恵子

【3.8 発売】

▶コンディヤック、デイドロの言語論、メネトリエ、カユザック、ノヴェールの舞踊論をひもときながら、舞踊が芸術ジャンルとして確立する背景を丁寧に辿ることにより、〈身体で語る舞踊〉がいかにして誕生したのかを追求する。

A5 判上製 / 314 頁 / 5000 円 + 税 ISBN : 978-4-8010-0791-8



# 小津安二郎はなぜ「日本的」なのか

具慧原

【3.14 発売】

▶小津の作品につきまとう「日本的」という形容詞は、いったいつ、誰によって、どのような意図で発せられたのか。作品をめぐる国内外の言説を精査することで、「日本的なもの」の多重性を明らかにし、その核心に迫る。

A5 判上製 / 384 頁 / 6000 円 + 税 ISBN : 978-4-8010-0799-4



# アンチ・ダンス——無為のコレオグラフィ

宇野邦一 + 江澤健一郎 + 鴻英良編

【3.19 発売】

▶肉体とともに言語の意味が無限に開かれるダンスは、いかなる強度をもった芸術なのか。「無為」「身体」「ダンス」の3部から多角的に論じ、現代思想の中心を貫くその問いの射程を眺望するプロジェクト。

A5 変判上製 / 313 頁 / 4200 円 + 税 ISBN : 978-4-8010-0752-9



# 翻訳としての文学——流通・受容・領有

松本和也編

【3.26発売】

▶「書かれた言葉を読む」とはどのようなことなのか。さまざまな時代、地域、言語によって書かれた文学は、いかに翻訳、受容され、読者にどのように敷衍されていったのかを、各国の近代文学のなかに探る。

A5 判上製 / 232 頁 / 3500 円 + 税 ISBN : 978-4-8010-0798-7



# レトリックとテロル

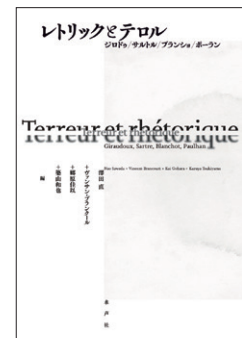
——ジロドゥ／サルトル／ブランショ／ポーラン 《日仏会館ライブラリー3》

澤田直 + V・ブランクール + 郷原佳以 + 築山和也編

【3.26発売】

▶言語表現のアポリアを提起したポーランを介して、戦前の文壇を代表する大作家ジロドゥと、新進気鋭のサルトル／ブランショとの知られざる応酬を明らかにし、戦後フランス文学の基調をなす言語観に迫る。

A5 判上製 / 296 頁 / 4500 円 + 税 ISBN : 978-4-8010-0801-4



水声社

東京都文京区小石川 2-7-5 tel. 03-3818-6040 / fax. 03-3818-2437 eigyo-bu@suisaisha.net

ブックカフェ



本の庭  
le Jardin des livres

# 本の庭



緑と本にかこまれて、静かな憩いのひとときを。

ブックカフェ〈本の庭〉がオープンしました。水声社のベストセラー(?)やロングセラー、シリーズ本など本を手にとってお読みいただきながら、香り高い珈琲や、自家製レモネードやジンジャーエール。プリン、月替りのシフォンケーキ、クッキーなどとともにゆったりとお過ごしいただけます。トータルデザインやメニュー開発もスタッフで行っています。3月に芸大を卒業したばかりの新進陶芸作家作成のマグカップ、住宅地の片隅の緑の木々も読書や会話のお供をいたします。

カフェに並んでいる水声社の本はカフェでお読みいただくことも、お買い求めいただくこともできます。カフェに並んでいない本を図書目録からご注文いただくこともできます(カフェにお取り寄せすることも、ご自宅にお送りすることも可能です)。新刊書は本屋さんで配本される1週間ほど前から販売しています。

営業時間：水・木・金・土曜日の11時から17時まで。

Instagram〈book cafe「本の庭」〉もご覧下さい。



本の庭  
le Jardin des livres

大田区山王 1-22-16 〒143-0023 tel.070-4171-0860 (営業時間中のみ)

(広告)